

グローバル通信

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN
2024.11 vol.66

ソーシャル・イノベーション研究コースの概要	1
修士論文中間報告会の感想	2
国内フィールド調査&政策実践・探究演習（海外）報告	3
前期の講義についての感想	4
協定先懇談会報告	4
事務局インフォメーション	4

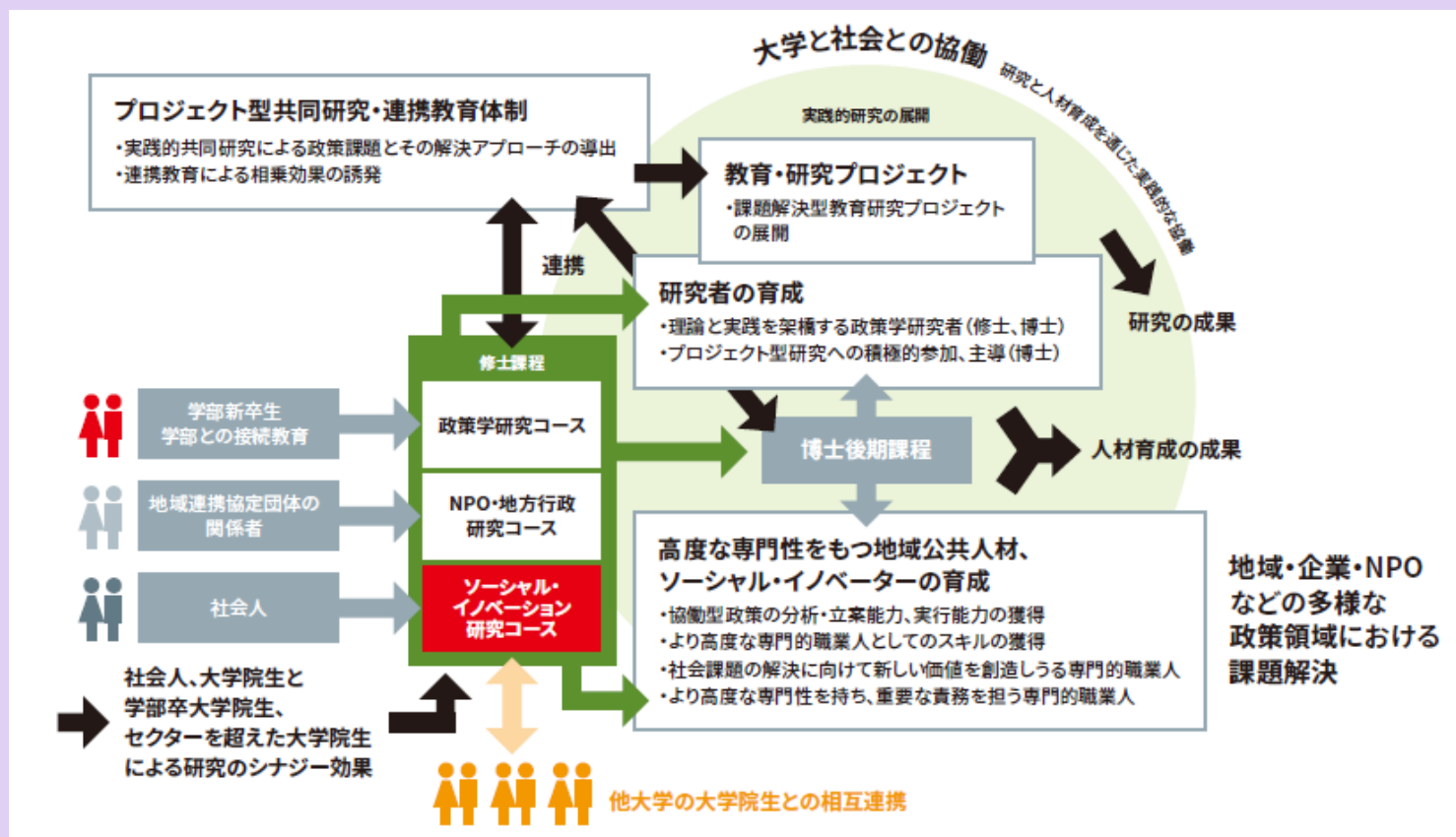
京都の街にも徐々にイルミネーションが灯り、心浮き立つ季節になってきました。そして、2024年のカレンダーも残り2枚を残すのみとなったなか、皆様いかがお過ごしでしょうか。地域公共人材総合研究プログラムの方と2年生の方は修士論文の執筆も佳境に向かわれているかと存じますが、お体ご自愛しつつ研究活動に励まれてください。

さて、本号では来年新設となる「ソーシャル・イノベーション研究コース」や、7月に行われた「修士論文中間報告会」、その他フィールド調査報告や講義内容の感想を掲載しております。ご一読くださいませ。

政策学研究科 地域公共人材総合研究プログラムに 「ソーシャル・イノベーション研究コース」を新設します。

ソーシャル・イノベーション研究コースの概要

社会的ニーズを満たすための新たな価値創造を実践的に研究したいビジネスパーソンをはじめとする様々な職業人と、若い大学院生とのシナジー効果によって、新しい価値の創造を通じて社会を変革したいという実践的な専門的職業人を養成します。まちづくりやローカルビジネス、イノベーションに関する理論や実践科目のほか、ソーシャル・イノベーション実践演習など革新的な発想によって地域のポテンシャルの新たな活かし方を実践的に研究する科目を学修することで、地域ポテンシャルの発掘と価値創造の力を修得します。



政策学研究科人材養成概念図

修士論文中間報告会の感想

龍谷大学大学院政策学研究科では毎年7月に修士論文の途中経過を報告する「修士論文中間報告会」を行っております。

政策学研究科から3名の方に報告会のご感想を頂きました。

恵川 典子（政策学研究科修士課程1年）

ふるえている。足でもない、声でもない……利き手の指がふるえているのだ。中間報告会の会場で席につき、パソコンをひらいてから、ふるえがおさまることはなかった。順番が近づくにつれ、のどの渴きを感じ、申し訳ないと思いつつも、壇上の発表者の話など一切頭に入ってこない。ただ、スクリーンのスライドを眺めていただけ。

数か月前にようやくノートパソコンを手にした私にとって、この中間報告会は、第一の関門だったのだ。スクリーンの前に立ち、ころもとなくパソコンを操作しながら発表を終える頃には、もうわたしのHPはゼロに等しかった。それでも、この関門をクリアできたのは、常日頃ご指導くださる先生方、ゼミで顔を合わせる先輩方、教室で共に学ぶ同級生たち、そして家族の存在が大きい。

ひとりのようでひとりでない。気がつかないところで、見えないところで、助けられながら、何足ものわらじをはいて過ごすこの一年。自分にできることなら、惜しみなくどんなことでもしよう。

第二の関門は何であるかはわからないが、ひとつひとつを丁寧に越えていくことで、目の前のみちが開けていくのだろう。

今西 賢（政策学研究科修士課程2年）

私は、公共交通(バス)の存続についての研究を行っています。この研究は、1回生の後期から進めているものであり、7月の修士論文中間報告会では、公共交通におけるさまざまな問題やそれに関する先行研究について発表を行いました。報告会では、普段面識のない修士の方や博士の方からの質問、また先生方からの質問などがあり、どれも的確な質問ばかりで自分自身の準備不足や研究不足がとても身に染みました。私自身、時間を気にしないような発表の経験はありましたが、中間報告会のような時間制限や枚数指定のされたレジュメなどの環境での発表の経験があまりなく、制限時間を気にしながらの緊張した発表となり、早口だったと感じています。他の方の発表は、とても聴きやすい口調や発表方法であり、研究分野でないものについても見聞を深めることができました。

自分の発表以外でも学ぶことはたくさんあり、全てを吸収することは難しいかもしれませんが、報告会の自分よりは成長できたのではないかと感じています。報告会で指摘のあった内容についてよく研究を行いながら、最終的な修士論文につなげていきたいと思います。

吉村 裕司（政策学研究科博士後期課程2年）

「中間報告会」…修士課程で修士論文を書く方々にとっては、その年の前期最大のハイライトではないでしょうか。なぜならば、学会発表ではありませんが、質疑応答時間にフロアから「素人質問で恐縮ですが…」というフラグが揚がれば、その後の夏休みにおける研究方針に影響が出るからです。ですが、5年前に私が地域公共人材研究プログラムで修士課程にてお世話になっていた時の中間報告会はどうだったかな、と思い起こせば、あの時に先生方などから頂いたコメントが、研究を進めるうえで大きなヒントになりました。（本当です）また、本当に答えに困ったときは指導教授の先生が助け舟を出してくださいました。今にして思えば、中間報告会に向けて大いに悩み、発表時に冷や汗をかき、その後に悩むことが、修士論文を完成させるうえで「大きな糧のひとつ」になっていたな…と感じます。

私、偉そうなことをしたり顔で言っていますが、中間報告会は博士後期課程の学生にとっても、研究について年間一回、進捗状況や方向性についてチェックを受ける大切な場であると自覚しております。修士課程と博士課程、課程は異なりますが、お互い切磋琢磨してよい研究に仕上げてゆきましょう。



修士論文中間報告会の様子

国内 フィールド 調査報告

鎌田 康暉（政策学研究科修士課程1年）

2024年9月11日～12日に神奈川県寒川町の一之宮公園、東京都世田谷区の下北線路街、群馬県安中市の碓氷峠鉄道文化むらの3か所を訪問しました。私の研究テーマは鉄道廃線跡の活用に関する研究で、こういった活用過程があって、誰がどのような事業を運営されているのか、また鉄道遺産の活用方法に興味があります。

最初に訪れた一之宮公園は、かつて支線の跡地で、園内に200メートルのレールが敷かれています。1番古いレールで1909年とのことで、地域鉄道の歴史を伝える大切な都市公園となっています。管理事務所の方にお話を伺い、興味深いと感じたことは、定期的に若い人が主導でミニ列車の走行会も実施されているようで、レールを残したことによって、新たなコミュニティが生まれていると考えました。

次に下北線路街下を探索し、シモキタエキウエや下北線路街空き地などをまわりました。かつて線路が敷かれていたところは個性的な施設に生まれ変わっていたり、イベント会場になっていたりと都市部ならではの線路跡地の活用方法について、大変勉強になりました。

最後に碓氷峠鉄道文化むらへ訪れました。ここは運転体験や展示車両の保管などをされている体験型の鉄道テーマパークです。ヒアリングにて、特に担い手不足や資金不足について課題意識を持たれていらっしゃいました。どのようにすれば課題解決できるか、今後の研究で明らかにしたいです。

今回のフィールド調査で、実際に現地で事業をされている方とお話して、新たな知識や知見が積み重なっていく充実感がありました。今後、調査した内容を整理し、修士研究に取り組んでいきたいと思っています。



政策実践・ 探究演習（海外） 報告

佐竹 星哉（政策学研究科修士課程1年）

2024年9月に政策学研究科にて開講されている「政策実践・探究演習」（海外）プログラムにて、7泊8日で韓国ソウル市に赴き、韓国における若者政策について知見を深めてきました。

本プログラムでは、若者政策に携わっている労働組合の方や政府機関の方々から、韓国の若者が置かれている苦境や支援する方策について雇用・住居・参画など様々な観点を基にご教授いただきました。また、事前学習として5回程度日本の若者政策についても学んでいたこともあり、日本の若者と韓国の若者の置かれている状況を比較しつつ学ぶことができました。

私自身、日韓の社会参画の違いを軸に研究をしているのですが、今回のフィールド調査を通じて重要だと印象付けられた点は、若者自身が思索し政策決定に携わっているかどうかでした。日本における若者政策は意思決定支援が乏しく、言ってしまうと大人から若者に「与えるもの」という認識が強いです。対して、韓国では政府機関に若者の代弁者となる担当者の方も存在し、2020年に施行された「青年基本法」をもとにして若者自身が政策決定に携われる仕組みも構築されています。

ただ、日本でもひきこもり支援やヤングケアラー支援に関して、先進的な面も持ち合わせており、日本と韓国が互いに情報共有をして政策を研磨していくことが重要であると本プログラムで気付かされました。

さらに、中央大学校と明治学院大学の3大学で交流する機会もあり、学ぶだけではなく友好関係を築くこともでき、大学院生として今回の渡航がターニングポイントとなりました。今回の経験をもとに研究に励んでいきたいです。



前期の講義についての感想

川瀬 遥奈（政策学研究科修士課程1年）

印象に残っている授業は、地域リーダーシップ研究です。第1回目はコミュニティ・バンク京信の石井規雄さんにご講義いただきました。内容は、コミュニティ・バンク京信のチャレンジとして、手間ひまをかける経営を目指すためにどういう姿勢を持つべきであるか、またソーシャル起業認定制度（S認証）と預金者をつなげる取り組み事例についてご紹介いただきました。最も印象に残っている点は、質疑応答の際の「信用金庫はそもそも地域に寄り添った金融機関であるから、地域のために手間ひまをかけるというコミュニティ・バンク京信さんの取り組みは、むしろ元々の信用金庫の役割に戻っただけではないか」というやりとりです。その回答として石井さんがおっしゃっておられたのが「変化した社会情勢に沿って変わってしまった信用金庫の役割をどのように取り戻すか」というところで、たとえば膳所支店では他の銀行が撤退してしまったときに地域に残り続ける選択をし、投資を行ったり、課題解決型店舗としての活動を通して元々の信用金庫としての信頼の回復に謹んでいこうとしている」というお話でした。最後の質疑応答の際にこのやりとりがあったことで、コミュニティ・バンク京信が取り組んでいる社内の業績評価撤廃の理由や、利益が出なくてもこれらの地域活性化のための活動をしている理由も、結局は信用金庫の信頼回復という思いに依拠しているのではないかと自分なりに理解しました。このように、利益が出ないことから他の金融機関が取り組めていない状況であるにも関わらず、その活動をするという意味や返しはあるということを実態で示しておられるコミュニティ・バンク京信の取り組みには考えさせられる部分が多く、非常に有意義な講義でした。

本田 リエ（法学研究科修士課程1年）

歴史のある龍谷大学にて学ばせていただき、様々な授業において「社会人として経験値だけでの知見ではなく学術的な情報収集などを利用すること」を教えていただいています。前期を終えて、「自分自身が深い思慮に基づく判断思考へ成長している」ことを感じており、このプログラムの素晴らしさを感じています。

自身の研究課題である「犬猫の殺処分をゼロにする」目的に対しても、同じプログラムに参加する社会人の方からの積極的な意見をいただけることに加えて、学部生や学部院生との意見交換の場も設定していただけていることから、論文にも多様な価値観を踏まえて検討することが出来ています。

前期の印象の残る授業は、「コミュニケーション・ワークショップ実践演習」と言うファシリテーションの実践を学ぶ授業です。この授業では世代間のある学部生と一緒にワークショップで課題を話し合う場を体験させていただき、ファシリテーターの重要性を学ぶことが出来ました。その授業を受けた後に、自らのフィールドワークにおいてワークショップの必要性を基に、「話し合うことの大切さ」を早速共有すると共に実践させていただき運用の改善などに役立っています。

さらに専攻している法学研究の授業では、法律に詳しくない私にも勉強の進め方から押さえておくべきことなども、とても丁寧な指導を行っていただける事から法律について抵抗することなく学びを進めることが出来ています。

修士論文の提出まであと3か月になりましたが、後期の授業においても論文指導を含めて研究内容を深める学びをさせていただいていますので、環境に感謝すると共にしっかりと思考をまとめて論文を仕上げていきたいと思います。

協定先懇親会報告

今年度もオンラインによる開催となりましたが、2024年7月18日（木）に「地域公共人材総合研究プログラム地域連携協定先懇談会」を開催し、27の各種団体様の方々にご出席賜りました。懇談会では、本学大学院の教育理念・目的、地域公共人材総合研究プログラムの概要や、プログラムに参加している2研究科（政策学研究科、法学研究科）の特長、2025年度に新たに設置する「ソーシャル・イノベーション研究コース」の概要などについて説明いたしました。後半の意見交換では、入学試験に関する内容やカリキュラムに関する内容など、様々な意見をいただき、大変有意義な会となりました。

事務局インフォメーション

政策学研究科 修士論文・課題研究報告会
2025年3月8日（土）9：30～（予定）

7月20日（土）に開催いたしました中間報告会では、多数の修了生の方々にもご参加いただきました。ありがとうございます。来年3月の修士論文・課題研究報告会につきましても、深草キャンパスにて対面での開催を予定しておりますので、ご都合がよろしければ、是非ご参加いただければと存じます。詳細につきましては、3月上旬（予定）にメールにてご案内させていただきます

地域公共人材総合研究プログラム ニュースレター『グローバル通信』 通巻66号 2024年11月

発行/龍谷大学大学院 地域公共人材総合研究プログラム H P/https://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/

連絡先/政策学部教務課

TEL：075-645-2285 FAX：075-645-2101

編集/安道亮、佐竹星哉

編集補助/今井航平、越野智晶

監修/グローバル通信編集委員会